名桜大学総合研究，(25)：107-119（2016）

調査報告

元東村村長宮里松次夫人の台湾・沖縄経験
―宮里ミヱ子オーラルヒストリー―

菅野　敦志[1)]

Memories and Living Experiences in Taiwan and Okinawa by the widow of former Higashi Village mayor Matsuji Miyazato: An Oral History of Mieko Miyazato

Atsushi SUGANO [1)]

要　旨

本資料は沖縄在住で台湾経験を有する人物へのインタビューを基にしたオーラルヒストリー集の一部である。本インタビュー記録は，沖縄県東村で1962年から1984年までの間に村長を務め，同村にパイン産業を導入し，つつじ園を開園した功績で知られる宮里松次氏のご夫人・宮里ミヱ子氏のオーラルヒストリーである。ミヱ子氏自身は台湾で生まれたが，日本の敗戦により1946年に台湾から引き揚げられ，父方の郷里である福岡に10年居住された後，1956年に松次氏の郷里である東村に移られた。本資料は，沖縄と台湾の人の移動とそれにまつわる個人的体験について，日本統治時代の台湾で実際にどのような生活を各個人が経験されてきたのか，そうした実際の生活体験の聴き取りを記録化し，研究の一助とすることを目的とする。

キーワード：オーラルヒストリー，台湾，沖縄，移動，東村

Abstract

This is one of a series of interviews which are the fruits of an oral history project that focuses on collecting memories of Okinawan / Japanese people who had living experience in Taiwan during the Japanese Colonial Era. The project's aim is not to record the political or economic success of prominent individuals; rather, it emphasizes recording personal life and experiences of ordinary citizens of the time, which would not be recorded in an official history. The first of this series is the oral history of Mieko Miyazato. She is the wife of Matsuji Miyazato, who was a former mayor of Higashi Village in Okinawa, from 1962 to 1984. This series of oral history interviews were supported by JSPS KAKENHI Grant (Number: 25257009).

Keywords: oral history, Taiwan, Okinawa, migration, Higashi Village

[1)] 名桜大学国際学群　〒905-8585　沖縄県名護市字為又1220-1　Faculty of International Studies, Meio University, 1220-1, Biimata, Nago, Okinawa 905-8585, Japan

【概要説明】

独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金　基盤研究（A）（海外学術調査）「日本敗戦と新しい国境による台湾・沖縄の変容の口述歴史に基づく研究」（課題番号：25257009）では，研究代表者の栗原純および研究分担者の所澤潤を中心とするオーラルヒストリーの採集・記録の蓄積を精力的に進めてきた（プロジェクトグループによる一連の成果は，『台湾口述歴史研究』シリーズとして，2015年３月に第13集まで出されている。編集：台湾オーラルヒストリー研究会，発行者：東京女子大学　栗原研究室）。

オーラルヒストリーは，語り手にとっての個別の史実をどのように一般化できるかという課題について，証言をいかに記録化するかと同時に，証言の批判的な読みが必要となってくる点がしばしば指摘される。しかし，現在においても，日本の植民地であった台湾で実際に人々がどのような環境の中で日常の生活を営んでいたのか，「内地人・沖縄人・本島（台湾）人」の関係性や相互の感情にはどのようなものがあったのか，彼らが戦後お互いにどのようなつながりを有していたのか等，当時（あるいはその後）の状況が十分明らかにされ尽くしたとは言い難い状況にある。そのようななか，戦後70年が経過し，かつて日本が有していた植民地での生活経験者の聞き取りにはもはや時間的余裕が残されていない。そのため，１人でも多くの日本統治経験者の聞き取り蓄積を残し，公の記録ではあまり見受けられない，こうした一次史料の一刻も早い記録化と蓄積作業の進展が急がれている。このような問題意識の下，これまでの研究グループによるオーラルヒストリーの成果を基に，筆者は研究分担者の１人として，沖縄出身／在住者で台湾での居住・生活経験を有される方々へのインタビューを実施してきた。本資料はその成果の一部として位置づけられるものである。

インタビュイーである宮里（旧姓：案浦）ミヱ子氏は，1925年（大正14年）台湾台中州大平生まれ。両親はミヱ子氏の出生前に福岡から台湾へ移住している（そのため，長女は福岡生まれだが，それ以降は台湾生まれ）。新竹州立新竹高等女学校，私立台北女子高等学院を卒業後，台中州庁に勤務。退職後，大日本製糖会社の会計係として勤務。1944年冬に台湾で当時陸軍中尉（中隊長）の職にあった沖縄東村出身の宮里松次氏とお見合いをし，終戦の1946年３月に結婚され，これが後の沖縄移住につながることとなる。同月下旬に福岡の仲原村（宮里ミヱ子氏の父方の郷里）に引き揚げ，福岡に10年居住されたが，1956年から宮里松次氏の郷里である東村に宮里氏とともに帰郷された。その後，宮里松次氏は沖縄の本土復帰前において立法院議員，中央教育委員，琉球政府農林局長を歴任，1962年から1984年までの間に東村村長を４期にわたって務められ（1968～76年は比嘉蒲春村長），村長在職期間中にパイン産業を導入し，「東村村民の森つつじ園」を開かれた功績で知られることとなる。

東村は「花と水とパインの村」をキャッチコピーとし，つつじ園（「東村村民の森つつじエコパーク」に隣接）は村内随一の観光名所となっているが，それらはともに宮里氏のかつての台湾在住経験と関係していることはほとんど知られていない。沖縄・山原地域の産業および観光の発展が台湾と密接な関りがあることは山原の地域史においても重要な点であるといえるが，何より，福岡出身の両親の下で台湾に生まれ，沖縄出身の男性と結婚したことで戦後沖縄に移住することになったミヱ子氏の体験それ自体が，様々な「境界と移動」を考えるうえで非常に示唆的かつ貴重である。しかしながら，本資料の最大の目的は，個人の経済的・政治的成功の軌跡を跡付けるためのオーラルヒストリーではなく，日本統治時代台湾で人々がどのように生活されてきたのかを記録化することにある。

インタビューは近親者のご紹介を受けて可能となり，2014年４月５日と４月11日の２回に分けて，場所は東村平良の宮里氏ご自宅にて実施した（本記録は４月11日実施分）。なお，宮里ミヱ子氏のライフヒストリーに関しては2011年に自叙伝も刊行されている（宮里ミヱ子『東風（こち）に吹かれて―松次と歩んだ52年』文進印刷，2011年）。本資料は同書に掲載されていない内容が中心となっているが，特に台湾での生活経験に焦点を当てているため，引き揚げ後の生活の詳細については同書を参照されたい。なお，文中で括弧書きがある部分は筆者による補足説明である。

1　幼少期の生活環境

菅野　お生まれになって，小さい頃からのお話を順番にお聞かせ願えればと思います。まずはお生まれになった場所についてお聞かせください。

宮里　台湾の台中州大平という片田舎で生まれました。

菅野　そこはどのような環境のところでしたか？

宮里　環境はですね，日本人が少なくて，日本人といえば学校（台湾人子弟が通う公学校）の先生，教頭先生とか校長先生，それから駐在さんだけでした。

　それで，お隣は事務所を一つ置いて，台湾の通訳の方が住んでいました。

　私は三女として生まれたんですけどね。長女は福岡で生まれて，次女から，私，弟，妹と，４人がこの田舎で生まれたんです。大平というところでね。

菅野　交通はどのようなものがありましたか？

宮里　その頃は乗り物がなくて，バスもなかった時代で

す。バスもなくて，台車というものできょうだい３人朝は学校に通うようになったんですけどね。

汽車もあったんです。製糖会社の汽車が。でもその汽車は時間が非常に遠くて，１日に何回かしか走らないもんですからね。台車できょうだい３人が朝は通学したんですよね。

でも本当に小さな台車に乗る時は，なんていいますか，川なんか通る時は怖かったですね。下にゴーッと川が流れているのに，こういう細い車線に乗ってね。

それで，その前に，幼稚園があったんですよ。汽車に乗っていかなければいけないところですけどね。姉はその幼稚園に入ったんですよ。それで，私も幼稚園に入れる，と母が幼稚園に連れて行って，馴染ませようと思って，丸い弁当箱にね，その頃うちらが好きだったおいしい炒り玉子を入れてお弁当を作ってくれてね。そして幼稚園に行ったんですよ。

そしたらクリスチャンの先生が，歳とったご夫婦が幼稚園の先生をされていたんですよね。とても優しくて。でも私は人見知りが激しくてね。どうしてもその幼稚園行かなかったんですよ。姉はとっても人見知りしなかったから行きよったんですけど，私は人見知りが激しくてね。１日行ったきり,「行かない」って言って泣いてね。幼稚園行かなかったですよ。

菅野　小学校については？

宮里　それでそのまま小学校（＝台中の明治尋常高等小学校）１年生にあがりましたよ。その間に弟が生まれたりしてね。それで，１年生になって汽車通，その頃から汽車通学ができるようになってましたね。朝ね。それで汽車で学校に行って。その頃はもう母が付いてこないとね，心細くて。いつも母についてもらって学校に行ってね。授業しながら,「お母さんいるかな」ってしょっちゅう廊下ばっかり見てね。何日間かは付いてくれましたよ。母がね。

でもね, ある時ひょっと見たら母がいないんですよ。「あらーどこに行ったのかねー」って，もう不安でしょうがないんですよね。それで休み時間になって見に行ったらいないんですよ。もうその時は少し慣れていたからね,「もうー仕方ない」って諦めてね。それから母は付いてこなかったんですけどね。

その頃はね，弟も生まれてたしね。（台湾人の）子守が弟をおんぶして付いて来てたんですよね。（笑い）子守といってもね, 大人じゃなくて子どもなんですよ。子どもはね，子どもが好きなんだって。だからおんぶされるのもね，子どもの方が喜ぶんですって。それで大人の子守じゃなくって，子供の子守で，10歳くらいだったでしょうね。その子守がおんぶしてね，あやしてましたね。そういう風にしてうちの弟も妹も育ってきたんですよね。

菅野　誰とどのような遊びをしていましたか？

宮里　帰ったらもう台湾人しかいないから，学校に行かない限り。だから台湾人と一緒に石けりしたり。庭に大きな木があったから，これにブランコ作ってもらったりね。サーカスの真似したり。（笑い）

とにかく田舎だから，友達は，周囲は全部台湾人でしょ。台湾語はもうペラペラになってるんですよね。（笑い）

だけど，学校に行けば，公学校（＝台湾人子弟が通う学校）っていう学校だったんですよ。そうね，こっち（＝大平）からだったら10分位のとこだね，走って遊びに行きよったんですけどね。それで，公学校の校長先生は鹿児島からでしたよ。鹿児島の方で，家族が４，５人おりましてね。私と同じ歳の男の子もいたんですよ。子どもさんが５人位いてね。だから，遊びに行くといったらこの学校，この校長先生のお家に行ってね。遊びよったんですよ。

そしてね，学校の教室を開けてね，黒板にいたずら書きしたりね。（笑い）もう，考えたらあんなことしていけなかったと思うんだけど。運動場駆け回ったり，肋木とかなんとかあったですよね。教室に入ってオルガンを弾いてみたり。（笑い）そういう遊びしてましたね。

警察の方もおられたけど，そっちは男の子，双子の男の子二人で。男の子だけだからあんまり行かなかったですけどね。それで，この学校の教頭先生と校長先生のところにはよく遊びに行きましたね。

２　家族構成

菅野　ご家族の構成についてお聞かせください。

宮里　両親とですね，姉が２人ですね。私が３女で，弟が１人，妹が１人で，一人息子でしたね。一人息子だからあの頃は，私なんか３女なもんだからね，女の子とは思わんで,「次は男の子」と思ったんでしょ。あの頃は男の子皆欲しがってね。男の子じゃなくてまた３番目の女の子だったから，父が名前付けなかったんですって。名前付けてくれないでね。

で，産婆さんが,「名前付けてないのねーミヱコさんはどうですか？」って言ってくれたんですって。産婆さんが。(笑い)それでうちの母が,「あーいいねー」っていうことで,「ミヱ子」になったんですってよ。それを後から聞いて。がっかりよね。（笑い）私に名前も付けてくれんかったのねー親が。

それで弟の時は名前を考えるのに一所懸命になってですね。なんとかいい名前を付けようと思って。それで台湾の占い師みたいなところへ行ったりしてね。そして，長男だけど,「恭次」っていう名前を付けたん

ですよね。「一」の字を入れると早く死ぬから，次男として，「次」の字を入れなさい，ということで。そしたら健康に育ちましたけどね。

菅野　それは台湾の占い師の方のアドバイスだったんですか？

宮里　そうなんですよ。弟はね。それで，「恭しい」という字にね，次男の「次」付けて。

台湾の人もよくしてくれましたもんね。色々と。

で，ちょうどうちの妹が生まれた時はね，松岡洋右って全権大使ね，あの人が国際連盟を脱退した年だったんですよね。それで私が「松岡洋右のようの，洋子名前付けたら」って言ってからね。（笑い）妹に洋子って名前付けたことありましたね。

妹が４，５歳の時に（新竹に）移ったんですよね。その時に，台湾の姉や，女中ですけどね，別れを惜しんでね。かわいがってくれて。いい姉やだったですよ。皆に見送られてね。

菅野　お父様については？

宮里　うちの父はサトウキビの，製糖会社の農務係だったんですよ。福岡の県立農学校卒業してたんですよね。それで製糖会社に入ったんですけどね。それで，その前に面白いことあったんですよ。うちの父がね，３男だったんです。３男でね，向こうは長男が跡継ぐでしょ。次男３男は養子に行くんですよ。皆，豪農のところにね。それでね，次男のおじさんも養子に行ったんですよ。大きいところに。

３男の父も，養子に行かされるところをね，１年間は教員してたらしい。だけどそれを辞めてね。「自分はアメリカに行くんだ」って。そしてね，「海外雄飛」の志を高く持って，「アメリカへ行くんだ」って言って，受けにいったらしい。そしたらね，その頃農家ではトラホームっていう目の病気が流行って。皆目が赤くて，目やにが出たりしてね。そういう病気が多かったんですよ。そしたらそれにかかってたらしいんですよ。もう，皆そうだから。それでね，アメリカは一番トラホームを嫌うからね，ダメだっていって蹴られたんですって。それでもうがっかりして「台湾に行くしかない」って言って，台湾に行ったんですって。（笑い）

台湾はそういうことなかったから。それで台湾に行く覚悟決めて。それで当てもないのに，台湾航路ですか，船に乗ってね，台湾に向かったらしいですよ。

菅野　お父様の台湾でのお仕事はどのように？

宮里　就職も何も決まってないでしょ。そしたらたまたま船の中でね，福岡の方で新聞社に勤めてる方がたまたま同じ船に乗ってたんですって。その山口さんっていう方がね，「あんた仕事あるのか」，「いえ，今から台湾に行って探すんだ」って言ったらね，「じゃあよく知ってるところに帝国製糖会社というところがあるから，頼っていきなさい」って言って教えてくれたんですって。それで，そこで就職が決まったんですって。その方がよくお見えになってましたね。私が覚えてる限りでは。あの頃は粉石鹸じゃなくて固形石鹸の時代ですよ。固形石鹸を箱にいっぱい持ってきてくださいましたね。父はいつも大歓迎してね。「恩人だ」と言って大事にしていたのを覚えてますね。

それでこの製糖会社にずっと入ってたんですけどね。その後戦争が始まって吸収合併になりましたけどね。大日本製糖にね，合併されて。後は大きな製糖会社になったんですけどね。

この帝国製糖というのはね，社長がね，元華族さまだったんですけどね，その方が社長だったんですよ。結局大日本製糖に吸収されて，その時父が私たちを呼んで，「これから大日本製糖になるんだよ」と言ってましたね。

菅野　お父様が福岡から台湾に行かれたということで，お母様はどちらから台湾に行かれたのでしょうか。

宮里　母はね，父が台湾で就職してから迎えに行ったみたいですね。母はね，呉服屋の娘だったんですよ。割と裕福だったんですよね。結婚してからもね，私たちに，機械編みできれいなセーター作ったり洋服作ってくれましたね。あの頃誰も持ってないシンガーミシンなんか持ってね。ミシンかけたりしてね。

菅野　お爺様やお婆様は福岡にいらしたんでしょうか。

宮里　そうですね。うちの父方は金婚式やってましたね。金婚式があるっていうことで家族全員で行ったんですよね。私はまだ，弟が生まれてなかったから3歳か4歳でしたよね。その大きな写真がありますよ。お爺ちゃんお婆ちゃん，そして孫までね，そういった大きな写真がありますけどね。

母方の方は，61歳の還暦お祝いの写真はあるんですよ。それで母方の両親が心配して台湾に来ましたよ。父が「あんまり田舎だから」って言って，台中に１軒家を借りてね。そこに何日間か，お爺ちゃんお婆ちゃんは。私は学校の帰りにちょっと寄ったりしましたんですけどね。それで安心して帰ったんですけどね。

父方の方のお爺さんは，農家だったから，農学校に入れるのでも相当，米何俵かを１カ月に売らないと学資にならなかったって言ってましたね。結局父は学寮だったんですよね，農学校も。それでお父さん＝お爺ちゃんが学資を持ってね，来よったんですって。学校まで。そん時にいつも「すまんなぁ」って思ってたって。お米を何俵か売って学資を学校まで届けてくれてたんですって。

だからね，うちの父は一所懸命勉強したんでしょう。あの頃級長ってのはね，タスキかけてましたね。（写真で）神社みたいな階段のところに映ってるんですけ

ど，タスキかけてましたね。「これは級長のだよ」って言ってましたけどね。父も頑張ってやってたんでしょう。教育熱心でしたから。だから，「子どもたちはどこまでも学校に行かしてやりたい」って気持ちはあったけど，結局戦争で何もかもパーになってね。

菅野　ご家庭の教育については？

宮里　私が小学校４年生の時に，姉がここから女専（＝福岡女子専門学校）に入ったんですよ。それから家の家計も苦しくなっていったんですよ。毎年お正月にはね，好きなもの買ってもらってたですよ。革靴履いたりね。着物買ったり，大きな手毬買ったりしたけどね。その年からはね，革靴も買ってくれなくなった。（笑い）相当やっぱりお金使いよったんでしょうね，女専でね…。それで女学校２人行ってたから。苦しかったと思います，家計。

　でも父は教育熱心だったから。母は，姉をね，大学に行かせるのに反対してたんですよ。なんでも，女の子だからね，洋裁でも習わした方がいいって。でも父が「いや，そうでない，女の子だからってね，ちゃんと学問をやらさんとダメだよ」って言ってからね。それで姉を女専にやって。それで学校の先生されたんですけどね。

　２番目の姉の時は戦争だから，短期の教員養成所に入って公学校の教員してましたね。私は自分の勝手で女子高等学院（＝台北女子高等学院）に行ったんですけどね。

3　幼少期

菅野　大平での思い出は？

宮里　でも大平におった時の生活はね，日本人は少なかったけどね，本当に台湾人との接触が多くてね。台湾のいろんな行事があると案内されたりね。墓のお祝いっていって，金持ちの墓は大きいんですよ，100坪位あるような。そういうところでお祝いしたりね。１年に１回は台湾人を100名位は招待してフルコースで台湾料理をご馳走しよったですよ。だからよくあんなお金あったなーって思って。製糖会社だから出よったのかなーって思ったりね。（当時は）子どもだからね，わからないけど。

　でも皆親しんでね，うちにもよく台湾人来よったですよ。父がどういう仕事してるのかよくわからなかったんですけどね。よく人を集めてはね，相当の人が集まりよったですね。そばに通訳を置いて話しよったですね。サトウキビの話をしてたんでしょう，多分ね。台湾のサトウキビはですね，本当にもう，３メートル位伸びるんですよ。沖縄みたいなこんなじゃなくてね。

　それで優秀な農家にはね，サトウキビを背景にしてね，生産者とうちの父と２人，サトウキビを後ろにしてね，台付きの写真を贈ってましたよ。毎年表彰してね。本当にまっすぐ３メートルあるんですよ。

菅野　そんなに背の高いサトウキビが育ってたんですね。

宮里　一度はね，こんな思い出がありますよ。台湾コブラっていって，すごい毒のある蛇がいましてね。この台湾コブラに咬まれた人がいたんですよ。台湾人で。その人はよく家に出入りしてたんですよね。サトウキビ作っていてよく家に出入りしていたもんだから。その人がコブラに咬まれたって後から聞いたんだけどね，その人が家に，事務所に来てね，竹の椅子に座ってるんですよ。そうした時に，目も潰れてるけどね，顔も腫れてたけどね，生きてたんですよ。それで，どうしてこの方が元気になったかって言ったら，コブラに咬まれたから，やけになってお酒をね，うーんと飲んだんですって。「どうせ自分は死ぬから」って言って。そしたらその酒がね，毒消しになったんだろうって，うちの父なんか言ってましたけどね，助かったんですよ。そういうことあったですね。結構毒蛇も多かったからね。サトウキビ畑だったら余計いるでしょ。

菅野　小さかった頃はどのようなことが楽しみでしたか？本などは？

宮里　本はね，母は『主婦の友』，私たちは『幼年倶楽部』，姉は『少女倶楽部』，父は『エコノミスト』。（笑い）そんなのとってましたね，毎月。だから，こういった本をずっと読んでから。あの頃の本はずっと良かったんですよ。付録にね，日本とか世界の名作ね，例えば『岩窟王』だとかね，一冊付いてきよったですよ。

　だからね，その頃はそれが付いてくるもんだからね，結構いろんな名作なんかを読んでましたね。あれは非常に良かったねーと思ってますよ。いつもいろんな本をとってくれてたもんだから，本が来たら，女のきょうだい３人頭突き合わせてから読みよったですね。（笑い）

　あの頃竹下夢二の絵が沢山出てましたよ。とか，長谷川町子の漫画ね。女学生だったけど，あの頃，長谷川町子。それとか『少女倶楽部』に長谷川町子の漫画が出てくるんですよ。本当にどの漫画も面白いと思って読んでましたね。福岡の出身の人ですけどね，長谷川町子。素晴らしい漫画家でしたね。

菅野　他にどのような楽しみがありましたか？

宮里　不思議とね，お菓子屋さんとかね，お菓子の見本を持ってくるんですよね。箱にね，引き出しがいっぱい付いててね，この引き出しの中が全部，12段位に区切られていてね，いろんなお菓子の見本が入ってるんですよ。それでお菓子の注文をとりに来るんですよ。このお菓子見てね，「あーこのお菓子がいい，あのお

菓子がいいー」って言ってね。（笑い）

そしたら母はね，高いのは買わないのよね。塩せんべいとか飴玉類ばっかり買うもんだから，「もう飴玉嫌い！ビスケットみたいのがいい！」って言って。ウイスキーボンボンなんかあったですよね。「あんなのがいい！」って。（笑い）高級菓子のお菓子の注文なんかもとりに来よったですよ。

菅野　家まで売りに来てくれるんですか。

宮里　それでまた，刃物研ぎも来よったですよ。本土の人だけどね。刃物研ぎも来てからね，よくうちの母が，包丁やらハサミやら研がしよったですね。それとか，蜂蜜を一升瓶にいっぱい買ったりとかね。（笑い）結構あんな田舎に日本人が少ないのに，よくこんなして物売り来よったなぁって思いますね。

近くに台湾人の店がありましたよ。雑貨屋さんがね。よくそこに私が買いに走らされたのはね，卵ね。鶏の卵がないんですよ。アヒルの卵しか。それでよく母に言われて卵買いに走りよったですね。

でもほら，よく食べ物もらいよったからね。果物なんかいつもいっぱいでした。家の中は。その頃自分でね，小遣いで物を買って食べるって知らなかったですよ。家にあるもんだからね。だからね，人が一銭持って何か買ったりするでしょ。「えーこういうことできるんだ」って。（笑い）買い食いするってことがわからんかったですね。家にいろんなものがあったから。

菅野　お家に食べ物が沢山あったんですね。

宮里　時期になるとパインも沢山あるしね。ポンカンはいつも山のようにあるし。時期になると，マンゴーね。それからレイシね。文旦，ザボン…。正月になったら餅類とか鶏とか，母はもう対応に追われてましたね。だからこの材料を使って，これだけ沢山あるから，それでフルコースを作って出してたんですよね。ない時には向こうから持ってきてやってましたけどね。

ラフテーなんかもありましたね。豚の三枚肉を甘く炊いたの。あれ食べるとお腹壊しよった。（笑い）いろんな料理が出てきよったですよ。油もん食べるとお腹壊しよった。（笑い）

サーカスもよく来よったですよ。サーカス観によく連れてってくれてね。納涼とかね。製糖会社が一番良かったでしょうね。官吏の人たちはそれほどでもなかったみたい。一番製糖会社が儲かりよったんでしょうねぇ。お砂糖で。非常に裕福に暮らせましたね。

だから，「物がない」なんていう時代が来るとは夢にも思わなかった。食べ物はいつも家に溢れてましたよ。四季折々の果物ね。「私お菓子が食べたいのに果物ばっかりあるー！」っていう位。（笑い）いつもいっぱいありましたね。

菅野　非常に生活は恵まれていたんですね。

宮里　だから，引き揚げて何年位だったかな。親子で集まるでしょ。そしたらね，「台湾ではどうだったこうだった」って話が出てね。（笑い）

そしたらね，何でもすぐね，「台湾では…」って出るもんだから，それが口癖になって，「台湾では…」って。そしたら「ほらまた，“台湾では”，が出た！」って。（笑い）

うちの母なんかもね，台湾行って30年位経ってたでしょうからね，台湾語も上手になってたしね。私は沖縄に来ても方言さえわからないもの。

菅野　お母様と台湾の方との接触で思い出されることは？

宮里　（台湾人の）女中を雇ってた時にね，母がね，一所懸命この女中さんと口論した後ね，二人で黙ってるんですよ。何かなーって思って母に聞いたらね，給料をあげたのにね，「もらってない」って来てるんですって。それで母がね，「払った，ちゃんとあげた」って。で，向こうが「もらってない」ってね，頑固はるんですよ。それでもう二人とも黙ってましたよね。そんな話だったらしいですよ。そして間もなくこの女中は解雇してましたけどね。やっぱり，あの，ウチの人に言われたんでしょ。「騙してからもらってこい」ってね。うちの母はね，「自分はキチンキチンと払ってるから！」って。「そんな払わんってこと絶対ない！」って。そういうことあったですね。（笑い）

でもその後から来た姉やは良かったですね。優しくてね。可愛がってくれて。だからね，母がね時々ね，台湾服ね，作ってやったりしてましたね。縫ってからね。あの頃既製服ってないからね。作らないと。

4　新竹への引っ越しと戦争，そして進学

菅野　大平の後に新竹へ引っ越しされたとのことですが。

宮里　小学校５年までは大平におったんですよ。それから今度父が転勤になったんですよ。新竹というところにね。そこで初めて転校することになったんですよ。それでね，別れる時に悲しくてね，ワンワン泣いて，私が皆の前で。（笑い）それでお別れして新竹に移ったんですよ。

嬉しかったのはね，新竹の製糖会社に行ったらね，市内だったから嬉しくてね。初めて市内から通学できるんだ，もう汽車通学しなくていいんだ。いつも何時になった駅にいなかきゃいかん，って，こればっかりでしょ。もうこれから市内になるんだって。嬉しかったですね。

菅野　新竹の学校で思い出されることは？

宮里　それで小学校（＝新竹小学校）６年の時に支那

事変が始まったんですよ。その時に「戦争が始まったー」ってお隣の方がもう召集されてね。見送りに行ったりね，皆旗を持って。赤いタスキをしてね。「大日本帝国軍人」って書いてあるタスキをかけて，「バンザイバンザイ」言いながらね。

召集受けたら２～３日しか余裕ないんですよ。すぐにもう行かなきゃいけないんですよ。だから皆見送りに行くわけですね。母なんか「大日本国防婦人会」って白い割烹着着てね，そしてタスキかけてね。私たちは小旗持ってね。小学生も中学生も皆見送りに行くんですよ。駅で皆「バンザイバンザイ」しながら。デッキのところで立って，兵隊さんが，最後まで手を振って。お別れを惜しんで。そして早々と学校へと帰っていくわけですよ。「あの子のお父さんも出征したねー」って皆で同情してましたね。

うちなんかは父がかなり歳いってたからそういう心配はなかったんですけどね。若いお父さんたちはどんどん兵隊に取られてね。戦死したりね，遺族になったりして。慰めることもわからんしね。戦争ってのは本当に嫌なもんですよ。

あの頃は飛行機が珍しかったからね。飛行機がぶーんと飛んだら，先生が「はーい皆運動場に出てから手を振りなさいー！」って。（笑い）こんなしてね，皆運動場に出てね，手を振ってましたよ。飛行機が珍しいから。たった一機だけど。戦争になるっていうのはね，子ども心にもね，不安でしたよね，何かわからんからね…。

菅野　新竹の学校では台湾人の学生はいましたか？

宮里　（新竹の）学校には，５年…６年…女学校３年の５カ年間おりましたね。でもね，やっぱり，その時（新竹高等女学校時代）クラスには台湾の方がいましたよ。台湾の方がね。そういう方たちは結局お金持ちの御嬢さんで，日本語も上手で。やっぱり，ちゃんとテストするんですよね。それで入ってきてましたね。一人は林（はやし）さんっていって。林（リン）さんだけど。

新竹に行ってからは，（新竹小学校には）台湾の人はいなかったですね。転校してからは。台湾人は1人もいなかったですね。女学校（＝新竹高等女学校）に入ってからは，新竹は広東人（＝客家人）が多かったです。台中は福建の人がほとんどです。新竹は広東人ですね。広東の方が多かったですね。学校でも戸籍調べるんですよね。「はい，福岡の人」，「はい，東京の人」，「はい，台湾の人，はい，福建か広東か」って。高砂（＝先住民）はいなかったですね。

そうね，１クラスに７～８人はいたでしょうね。女学生の時は。彼女たちは公学校でしっかりと勉強して，そして女学校受けて。彼女たちは理数に優れてましたね。

菅野　台湾の現地の人との交流で特に記憶に残っていることなどはありますか？

宮里　私が新竹に移ってからね，郭さんって方だけど，その方がとっても良くしてくださってたんですよ。その方に娘さんがおったんですね。ちょうど妹と同じ位の娘さんがおったんですよ。それでうちの母にね，「自分の娘に，お正月に着物を着せてあげたいから，これあつらえてくれないか」って言っていらしたんですよ。それで母がね，足袋から襦袢からね，全部ひと揃え。和服を揃えてね。それでお正月に着せてあげたんですよ。花もつけてね，かっぽり（＝下駄）も履いてね。喜んでね。そしてうちなんかと一緒に仲良くこんなして晴れ着着てから遊んだことあるんですよ。

こんなしてね，自分の娘を娘に仕立ててね。本人も可愛い子でしたよ。喜んで私たちと一緒に遊ぶしね。妹なんかとも遊んで。楽しかったの覚えてますね。そしていろんなもの，おせち料理食べたりね。だからそういう方がね，戦争に負けてどうなったか…。本当に「日本人に近づきたい」って気持ちがあるから，お名前も変えたりね，生まれてくる子どもに日本名を付けたりね，してましたよ。

いつも思うのは台湾の軍人の方ね，志願してから兵隊になって戦死した人たちのことを思いますよ。この人たちは遺族手当もないんだろうなぁって思ったりね…。

菅野　その後女学校，台北女子高等学院へと進まれたわけですね。

宮里　女子高等学院に行ったんですけどね，でもね，行ってもね，資格が取れないんですよ。女子高等学院２カ年行ってもね。まぁ小学校の教員免許位はくれるけどね，後は何の資格もないんですよ。それでもう私も飽き飽きしてね。洋裁専門に勉強したいな，と思いましたね。

あそこ（＝台北女子高等学院）はもう花嫁学校だから，結局台湾の上流家庭の人でいっぱいだったですよ。皆金持ちの御嬢さんでね。皆おしゃれして来よったね，お化粧したり。（笑い）まぁ，先生がアメリカのワシントン大学（＝卒業）の洋裁の先生だったもんだから非常に自由でね。楽しい学寮生活が送れましたね。

菅野　台北高等女子学院はお嬢様学校で有名だったんですね。

宮里　上流家庭ってのはね，上の人同士で，こっちの人とこっちの人と縁があったりするんですよ。それで私が聞いてびっくりしたのはね，自分の息子が適齢期になるでしょ。そうするとね，女学校にね，下見に行くんですって。そしてね，大体目を付けてるんでしょうね。そしてね，授業参観なんかするんですって。そして，この人の成績を調べたりね，環境なんかも調べたりし

てね。そしてね,「いい子, 美人な子」を選ぶんですよ。親は。

それを聞いた時にね,「だから皆美人で頭が良くってね，この金持ちは皆素晴らしいんだなー」って。嫁選びを親がね, ちゃんと決めるんですよ。どういう人, どういう環境でどういう…って調べてね。

菅野　学院では台湾の上流階級の方々との接触が多かったようですね。

宮里　台湾の金持ちっていうのはすごい邸宅構えてましたね。台湾の上流階級の人っていうのはね，台湾全島に通じてるんですよ。上流階級の人は。

だからね，私が女子高等学院に行った時はね，台北の人だけど, 高雄の人を知ってる。上流階級の人たち，皆こう連携をとってるんですね。林家とか荘家とかいろいろありますわよね。だから，こういう人たちの交流で，家同士で結婚したりするんですよね。だから皆教育程度も高いんですよ。

戦後行った時なんかもね, 皆大きい事業してました。女性でもね，市長になった人もいましたしね。教育レベルが高いから，そういう人たちは皆偉くなってましたね。

それでお医者さんが多かったですね。だからね，台湾はね，いくら優秀でもね，管理職になったら，日本人は加俸が6割付くけど台湾人は付かないでしょ。それでね，皆公務員ならないんですよ。そして皆お医者さん，弁護士，これが一番多かったわけ。だから弁護士さんなんかも多かったですね。弁護士も難しいはずだけど，台湾の人よく弁護士さんなんかになれるなーと思ったですけどね。もう，医大なんかにも入って卒業してくるし，お医者さんになるしね。びっくりしたですよ。だから今でもお医者さん多いはずよ。台湾人医者が多いから，それで内地で開業してるんじゃないかな。

菅野　戦時中，学院ではどのような思い出がありますか？

宮里　戦争もあったから，爆弾が来たり空襲警報とかなんとかね。電球は皆黒いものを被せて，光がもれないようにね，その灯りの下で本読んだり勉強したりしてましたよ。

だからね，学院も，食糧難の時代でしょ，食べ物がないんですよ。だから割烹の時間ね，料理の時間なんかの時ね，材料がないのよ。代用食の時代だから。そしたら先生がね，呼びかけるわけよ。台湾の皆さんにね。「お願いがあるんだけど，料理に使う油とかないから，あったら何とかしてくれませんか」って。聞いてるの。(笑い)

そしたらね，本当に手に入るんですよ。金持ちだからね。だからね，相談すれば手に入るんですよ。だからね，学校にね，こんな牛肉の脂，あの固まったのなんかね, とってありましたよ。だからね, こんな脂使ってからね，料理しましたね。

菅野　台湾での学校生活で，日本人と台湾人の学生の関係はどのようなものでしたか？

宮里　台湾の人との付き合いってのもね，子どもの頃はよく遊んだんだけれども，やっぱり女学校入るようになってからは父の職場も変わったし，あんまり交流はなくなっていましたね。

やっぱり，女学校入っても，台湾人は台湾人同士で集まるんですよね。どうしても固まりよったですね。台湾人の方はね, 自分たちの出身校の人たちとかでね。私はもう学院に行ったから，その後皆どうなったかな…。

菅野　その頃ご家族は。

宮里　で，そのうちに姉が女専卒業してね，台北のＮＨＫに就職するようになったんですよ。そして，子ども番組のね，原稿書いたりしてましたよ。そしたらね，父がね,「放送局辞めさして教員にさせる」って言ってね，交渉してから。それで女学校に移ったんですよ。それで第二高女に行ったんだけれども，今度はうちの姉の出身校の台中にね，また戻したいって言って。自分たち台中だから。また父が戻して台中に連れてきて。(笑い)

そのうちに結婚しましたけどね，姉。結婚したんだけれども，（旦那さんが）早く亡くなったんですよ。喉頭結核でね。そしたら後から聞いたら喉頭ガンだったみたいね。それで若くして未亡人になって。子ども２人育ててましたね。

5　松次との出会いと結婚

菅野　松次さんとお知り合いになったのは台湾でということでしたが。

宮里　私のお隣に野村さんていう方でね，製糖会社でも会計課長されていた立派な方がいましてね。元々は琉球銀行におった人でね，製糖会社に入ってね。会計課長してらしたんだけどね。で，沖縄の人は連携が良くって，沖縄の人がどこにいるってこと，よく将校さんが出入りしてましたよ。で，その中の一人だったんでしょ。

野村さんがお隣の人だったから。「沖縄の人でね，大学は出てないけどね，師範しか出てないけどね，立派な青年がいるからいっぺん会ってみたらどうねー」ってことを母に持ちかけてわけですよ。それで間もなく私たちは引っ越したんですよ。他の遠いところにね。で，その時に野村さんのそういう話がまた再現してから，それで見合いしたんですよね。ちょうど

戦争の激しい時に。灯火管制でもう，電気も暗いしね，真っ黒なカバーをかけてここだけが明るい。そういうところで一応会ったわけですよ。（笑い）

菅野　そして松次さんとご結婚されて。

宮里　それから戦争がますます激しくなって，終戦の頃には沖縄は壊滅状態だっていうことね，聞いた時に主人はどんな気持ちだったかな，と。全然口に出さなかったですけどね。両親も歳とってたし。６男でしたからね，うちの人は。母が45歳位の時に出来たらしいんですよ。ですからかなり高齢だったと思います。非常に心配だったと思いますけれども，口に出しませんでしたからね。

で，結局戦後軍隊にですね，長男はブラジルでしょ，次男，３男，４男，５男は航空隊，うちの人は陸軍。５人戦争に出たわけですよ。だから，お父さん，お母さんは，５人も「軍人の家」といってね，国から表彰されても何にも嬉しくないと。そうして言っていたそうですよ。５人も兵隊にとられて。

長男兄さんもブラジルに行ってて，結局一生涯会えないで二人は別れてしまったんですけどね。「こんな兄弟もいるねー」と言ってね，いつも言いよったんですけどね。生まれて一度もあいまみえないでね，別れてしまうなんてねーって。ちょうど主人が生まれる年に兄さんがブラジルに行ってしまったんですって。不運だったなーって思いますね。

菅野　戦争で皆さんご苦労されたんですね。

宮里　だからね，うちの父がですね，うちは５人きょうだいのうちね，３人が姉，弟は１人，で妹でしょ。そうするとね，戦争がたけなわの頃はね，税金も相当上がってたんですよ。で，うちはね，父が働く，姉が働く，だからね，税金はダントツで一位に高かったんですって。

で，家帰って来てからね，「うちはね，税金がね，製糖会社で一番高いんだよ」と言ってね，話してましたよ。「お国のためだからね，いいけどね，しかしお前らは女に生まれて良かったなぁ。男だったら３人とも兵隊になってたよー。女に生まれて良かった」ってつくづく言ってましたね。

菅野　女だったから犠牲にならなくて良かった，と。

宮里　だから主人の方なんかは５人も兵隊になってね。結局２人は亡くなったんですよ。それで生きたのは主人と。結局兄さんは戦死して。弟も病死したんですよね。で，お母さんお父さんはもう戦後ね，やっぱり，捕虜になったりして疲れ果てて，子どもたちはどうなったかなーって言って亡くなったんですって。お姉さんも結核になって亡くなったんですよ。５人が亡くなった。帰ってきたら５人もいないんですよね。

で，幸い兄さんが２人元気だったから，この兄さん２人に助けられてね。兄さんはね，ここで議員してましたよ。

菅野　松次さんだけでなく，お兄様も議員をされていたんですね。

宮里　２人ともお兄さんはね。部落の有力者だったから。だから私たちもなんとか良かったんですけどね。それからもう，「松次，君はもう政治家になりなさい。そのために働きなさい」って言われてね。それで区長から始めたんですよ。

区長から始めてね。それで選挙に立候補して落ちたのよね。３人立候補したんですよ。で，主人が最下位だったんですよね。そしてね，当選した村長と助役とうちの主人の３人で争って，それでこの助役が２，３票の差で落ちたんですよ。で，平良さんって方が当選してね。

そしたらこの，落ちた方がね，うちにいらしてね，松次に「告訴しようやー。この２，３票の差っていうのは間違いだろうからね，告訴しよう」ってしょっちゅう来よったですよ。で，大宜味の方が議員か何かしてたんですけどね，その人連れてきてね，「告訴しよう告訴しよう」って来てたんですよ。

菅野　それで告訴したんですか？

宮里　で，主人は「僕はもういい，あんたやりなさい。僕はもう最下位で落ちてね，告訴なんかしないよ」ってやらなかったですよ。で，この人はね，２，３票の差で負けたのが悔しいもんだからね，有力者の方たちと結託してね，告訴すると言って騒いでましたよ。どうなったか私も覚えてないんですけどね。娘が大きな病気したもんだから。で，主人は告訴しなかったですよ。

そしてそのうちにこの方は病気で亡くなりましたね。で，主人が幸い拾い上げられて，良かったですけどね。

菅野　台湾で松次さんと知り合われた時，台湾では内地人，沖縄人，台湾人沖縄の方はどのような関係にありましたか？

宮里　あーそうねぇ。どっちかというとね，台湾の人よりも沖縄の人の方が（内地人から）ちょっと軽蔑されていたね…。うーん…。私はよく理由はわからなかったんですけどね。子どもの頃はね。歴史でも習いませんよ。沖縄がどうして薩摩藩にあれされてこうなったっていうのはね。全然学校で習いませんからね。ただもう，沖縄県というのは九州の一つであってね。だからなんでこう沖縄の人は差別されるのかなーって。顔はちょっと独特の顔をしている人はいましたけどね。でもわからんかったですね…。だから主人は私と結婚したかったはずですよ。（笑い）

やっぱりね，そうした差別を強く感じてたはずです。

だから私が「方言習おう」って言った時にね，怒られたんですよね。なんで方言悪いことないのにね，（そしたら主人が）「方言札ってのがあってね，方言使ったら罰せらたことがあった」って。

6　台湾での思い出，そして引き揚げ

菅野　台湾時代で楽しかった出来事は何ですか？

宮里　やっぱり家族で揃ってサーカス観にいったりとかね。遠かったんだけどね，納涼に行ってね。花火大会ですよ。台中公園って公園があるんですよ。きれいな公園ね。そこで納涼大会があって。必ず連れて行ってくれてね。で，帰りは汽車がないから，ちゃんと台車を頼んでおいて，帰りは台車で。もう眠くてね。帰りはもう眠りながら歩いたのを覚えてますね。（笑い）そこでやっぱり夜店なんかがあるからね，これが楽しかったですね。

菅野　台湾時代で悲しかった出来事はありますか？

宮里　やっぱり戦後ですね，引き揚げる時にですね，台湾の人たちが泣いて来てね。「あんたがたもう内地に帰るのねー」って。せっかくこんなに台湾に馴染んでね，皆と仲良くなったのにねっ，て。向こうの方がかえって悲しんでね。こっちはもう，これから先がどうなるのかっていう心配ばっかりしてるわけよ。（笑い）

　それでもう，家に来てね，何日間も片づけたりするの手伝ってくれましたよ。内地帰るもんね，って。手伝ってね，名残り惜しんでね，最後までやってくれてましたね…。だから考えたらさ，日本人よりも台湾人の方が情が厚いなと思いますね。（笑い）

菅野　戦中戦後とご苦労もあったかと思いますが，引き揚げまでの生活はどうでしたか？

宮里　戦争が終わったらさ，途端にお店に物がいっぱい出だした。高いけど。（笑い）台湾の人たちには，あるところには物があったはず。（戦争中）物はないのにね。

　高いけど物はあるんですよ。それでほら，物（＝物価）はどんどんどんどん上がっていくでしょ。で，もう，給料は沢山持ってたけども，あんまり物価が上がってね，食べるだけでもね，相当お金かかりよったですね。（引き揚げの際に）1人1000円しか持てないから，1000円だけしまっておいて，後は飲めや食えやーって。（笑い）食べるだけ食べよう，今日はどこどこですき焼き食べよう，今日は何食べよう，って言ってから。（笑い）使い果たして帰ってきたですよ。1000円だけ持って。馬鹿だから，隠して持ってこればいいのになーって今となったらそういう悪知恵もあるけどね。（笑い）その頃は皆バカ正直だから，たった1000円だけ持ってね，帰ってきたんですよ。

　その1000円でね…主人と二人で2000円でしょ。引き揚げて来てからね。まずね，「布団買おう」って。まずね，間借りして布団を古着屋で買って。それから食べ物はね，なんとかもう工面してね。キャベツをご飯に入れて食べたり。（笑い）

菅野　引き揚げにまつわることで印象に残っていることはありますか？

宮里　そうですね，ここでいう県庁ですけどね，州庁にね，しばらく勤めてたんですよね。それで父が転勤したから，家を借りて勤めるというのは嫌だからって父の製糖会社に入ったんですけどね。

　でね，戦後（直後）ですね，友達が州庁（日本統治時代の台中州庁。戦後直後は台中県政府と台中市政府が合同使用）にいるもんだから，訪ねたことあるんですよ，会いにね。行ったらね，もうこの友達がね，それまでね，もう無くなったんだけどね，私総務課におったんですよ。総務課長，係長，って順番がありますよね。そしたらね，行ったらね，ヒラ職員だった台湾の人がね，課長席に座ってたの。そしてね，今まで給仕しておったような台湾の人も，格上げになってね。もう中がガラリと変わってましたよ。

菅野　台湾人が昇進していたんですね。

宮里　でね，「郭さんて人，あの人が今課長よー」って。宮本さんっていう改姓名した女性がいたのよ。よく一緒に遊びよったんだけども。この宮本さんが，話してくれて。「あの人が課長になってから，あの人が給仕係から上がったよー」って言ってね，話してくれて。彼女色々話してくれましたけどね，

　皆もうほら，引き揚げていなくなって，結局はほら，州庁も皆台湾の人が全部入って，格上げになってた。そりゃそうよねーって思ったけどね。時代のね，戦争に負けた，これが。（笑い）

　（州庁は）建物も立派でしたしね。そんなのも全部残ってるわけだから，それそのまま台湾がね，活用してるからいいと思いますよ。韓国みたいに壊したりしないでね。大事にしてくれてるから…。

　だけどね，自分も筆不精なもんだから，だんだんとこう，（手紙を）書くのもあれして（少なくなって）…。お互いにだけどよ。（笑い）

7　台湾から福岡へ，そして沖縄

菅野　ご家族は引き揚げられてどうされましたか？

宮里　父も引き揚げてから何もやりませんでしたね。人がいいもんだから，結局はもう引き揚げてから親戚が土地を一反分くれたんですよね。その一反分の土地をね，「商売しよう」って言って儲け話を学校の校長先生しとった人がよく家に出入りしてでですね，「こうい

ういい話があるからね」って，石綿ですよ。父からいつもお金取っていきよったですよ。それでせっかく，あの当時で10万円ですよ。一反分の土地を手放してですね。

結局これを分けてくれた親戚が買い戻して。こんなことがありましたね。騙されてね。だからあの時は悪い人はおったなぁって思いますよ。でも親戚はよくしてくれたからね。

菅野　台湾から福岡へ，そして沖縄へ行かれて，戦後は以前の台湾生活との差が感じられましたか？

宮里　台湾は「蓬莱の島」って言って，米は２回出来るでしょ，サトウキビはあんなよく出来るでしょ，だから日本政府は台湾に本当に力入れてたわけですよ。(台湾に対して）沖縄はほら，もう（国から）見捨てられてたわけよね。私が来た時は皆茅葺きですよ。瓦葺きの家なんて数えるほどしかなかった。皆茅葺きですよ。台湾から見るとね，本当に格段の差ですよ。

菅野　戦後，沖縄で生活を始められた時はどうでしたか？

宮里　もちろん戦争で皆焼野原にはなってますけどね…。本当に茅葺きばっかりでした。お布団もなかったですよ。本当に。だからね，私たちが来てからはね，「生活改善」っていって布団作りね。講習会って先生呼んできて，布団作りなんかして。皆布団を「あったかい，あったかい」って喜んでね…。

格差はあったですね。この地（＝東村）ってのは貧乏の最たるものだったですよ。豚を養って。豚もたくさんではないよ，２～３頭しか養ってないよ。それを正月には一頭殺して，後は子豚を売るとかね。そういう生活だったんですよね。

菅野　非常に格差があったんですね。

宮里　だから農業なんてサツマイモ植えてるだけだったんですよ。畑一面全部サツマイモ。サツマイモは掘ったらね，またすぐ植えるんですよ。そうすると一年中サツマイモはとれるんですね。だから通常は皆イモばっかり食べてたわけ。そして，食べたイモのカスは，豚にやる，と。イモの葉とね，サツマイモ（のカス）を混ぜてドロドロにして，そして豚にやるわけ。そんな生活してましたね。

菅野　東村で生活を始められた時は大変ご苦労されたんですね。

宮里　だから，燃料も，ガスはないし，薪。でもね，うちの主人がね，どこからか木炭をどこからか手に入れて。で，七輪に木炭で私はご飯を炊いてましたけどね。米も少ししかないからね，米屋に行って闇米を買って。（笑い）その頃は農家でもお米が足りないから，タイ米ね。パラッパラしてるの。あれがね，まずくてね，臭いはするしさ。（笑い）

宮里　あの頃はだから，買い物するにも店は遠いし，品物は無いし，蚊取り線香も売ってないしね。名護まで買いに行きよったですよ。そしたら名護まで行くのにガタ道でもう…。車酔いしてね。もう，這う這うの体で帰って来よった。カーブが多いとね，車酔いしよった。1時間かかりよったからね，名護まで。で，蚊取り線香やらお腹の薬やら塗り薬やら買って。（笑い）

でもやっぱり家を造ったり土地買ったりしてね。お金を使い果たして。後は銀行からね，農家にはお金貸さないのよ。それで信用金庫に行って，いろんなことを説明してからようやく借りてきて，やりくりしてたと思いますよ。

そのうちに選挙になってね。（笑い）お金を借りてきて立候補したものの落ちてね。落選したんですよ。

菅野　松次さんが選挙で落選されたんですね。

宮里　だって知名度もないのに。福岡から帰ってきてから。落ちたんだけど，当選した村長が，松次を助役に引っ張り上げてくれて，それから政治家になったんですね。その前に一度（平良の）区長になりましたね。区長になって，政治というものが分かってきたんでしょう。

それで平良さんっていう村長が松次を認めてね。一緒に戦った相手ではあるけど，助役に拾い上げてくれたんですよ。そしたら体調崩されたから，その方が。松次が助役だけれども代わりに村長やって，って。そしたら認められてね，村長やったんですけどね。本当に何もない時でしたよ。電気もなければ水道もない，ガスもない…。

８　台湾時代の友人との戦後の交流

菅野　戦後，台湾の方々との交流はありますか？

宮里　女学校時代の友達は引き揚げてわからんくなりましたけどね。でも奇跡だね。何年か経ったらさ，同窓会が開催できるんだから。（笑い）あの時はびっくりしたですね。皆何十年ぶりかに会ってね。同窓会，同級生会か，これができたんですよー。もう北は北海道から，台湾で結婚した人もいるしね。マレーシアに行ってる人もいるしね。皆もうそれぞれ引き揚げて苦労したはずだけど。その間はわかりませんよ。それで30年40年経って初めて皆ゆっくりしてから集まったんですよね。だから岡山でやったり箱根でやったり。関西，京都でやったり。沖縄でも２回。やりましたよ，同窓会ね。

菅野　それはすごいですね。

宮里　だから私なんかも学校卒業して何十年も経っても友達が福岡まで，台湾からね，私にね，「私は東京に行くんだけど，帰りに福岡に寄るからね，会おうね」っ

て言ってね。そして，わざわざ福岡まで会いに来て。桜の咲く時期にね。そして桜観たりね。

で，その時私がね，「台湾の人だからねー中華料理は…どうしようかな，何を（食べさせて）あげようかな」って思ったらね，「握り寿司がいい」って言うわけよ。（笑い）

「えーっ！台湾の人って刺身食べなかったでしょ！」って言ったら，「今は食べるのよ。握り寿司大好物よ！」って言うわけ。（笑い）「えー！そうだったのー！」って言ってね。びっくりしました。でも皆ほら，握り寿司が好きでね。びっくりしましたねー。刺身も食べないし…って思ってね，豚肉料理かなーなんて思ってたらね。（笑い）とんでもない。皆もう日本人みたいになってね。刺身も大好き，握り寿司も大好き，ってね。あー，あんなに変わってたんだなーって。（笑い）

菅野　戦後になって日本食を食べるようになったと。

宮里　で，彼女のいとこはね，福岡に来て帰化してね。台湾には時々帰るわけね。台湾の正月の時に。旧正月に帰る位でね。改姓名してね。日本人になってますよ。（彼女とは）いつも親しくしてね，それで福岡まで会いに来てくれたり，「自分のいとこが歯医者さんしてるから福岡で開業する」って言って。で，息子はまた静岡県で開業してるんですよ。改姓名してね。そんなしてからね，皆日本国籍取ってますね。で，３男だけは台湾の国籍残してるって言ってました。自分がいるから。後はアメリカ国籍とかね，日本国籍とかね。

菅野　台湾の将来に対する不安がある。

宮里　だから皆ね，先の先まで考えてね。「中国には絶対行かない」って。台湾の人でありながら中国嫌いですよね。だから今でもまだやってますでしょ。馬英九とね。だから李登輝なんかが元気な間はいいけど，後はどうなるかわかりませんね。

李登輝の奥さんが，この，曽山（＝曽文恵，李登輝元総統夫人。日本時代は改姓名のため曽山文恵。台北女子高等学院でのクラスメート）さんなんかもね。私ね，いっぺん行ったことあるんですよ，お家に。立派なお家でね。クリスチャンでね。皆教会に行くと言ってね。その日は日曜日だったか。教会に行きよったですね。あんなエリート階級は皆クリスチャンですよ。私も一緒に行こう行こうって。

菅野　李登輝元総統の奥様ですね。

宮里　（台湾へ）行ったらね，歓迎してくれますよー台湾の人。だからね，自分たちも差別受けただろうけれども，そういう恨みはなく。それで，私の友達なんかもね，長井先生って言って，福島だったと思うんだけどね，科学の先生だけれども，そういう先生がおられましたよ。その先生がね，学寮の寮委員長してたんですよ。そしたらね，わざわざ福島まで会いに行ってるの。「恩師だ」って言ってね。「わざわざ福島まで会いにいったのよー」って。だから本当に，自分がお世話になった先生ってのは，皆非常にたてまつってね。尊敬してましたね。

菅野　福島までですか。

宮里　台湾の方なんかもね，よく来てくれましたよ。うちの父なんかも，だからね，台湾の自分の部下たちがね，わざわざ訪ねてね。それで，竹で作った敷物ですよ。あんな大きな物持ってきてね，プレゼントしてくれたりね。いろんなことやってくれてましたねー。もう，戦後何年も経ってもよ。だから，台湾の人ってこんなに恩義忘れない…。

でもね，やっぱりうちの人がね，自分がね，自分の部下に厳しくやってきたからね，部下に会うのを嫌がってましたね。もう自分がね，あんまり厳しく軍隊で厳しくやったから，もう会うのが忍びないって。またうちの人は軍隊で表彰されたりしてましたよ。戦後に仕事がないって時に私が「自衛隊に入ったら？」って言ったけど（笑い），絶対に行かなかったですね。…略

菅野　台湾の方々が日本まで来てくれていたんですね。

宮里　うちの姉はね，台南の二高女ってとこで教員してたんですよ。そこはほとんど台湾人。一高女は日本人が多くて二高女は台湾の人が多かったんですよ。だから台湾の教え子が沢山いるんですよね。そうするともう戦後ね，「先生，先生，台湾に来てください」って言ってね。招待されて。結局定年退職してからすごく歓待されましたね。私も付いてったんだけどね。（笑い）

菅野　歓待されたんですね。

宮里　すごいですよ。恩義を忘れないでね。いつまでも感じてるんです。だから，教員してた方なんかはね，台湾に来るってなったらすぐバーーッて連絡し合ってね。集まってね，歓迎するんですよ。日本ではそういうことはほとんどないけど。台湾の人ってね，やっぱり，親孝行とか忠義とか，師を敬え，といった教えをね，忠実に守ってるわけね。今ブラジルもそうらしいですよね。ブラジルも昔の日本が残ってるっていいますものね。

菅野　台湾のご友人は戦後どのように過ごされてましたか？

宮里　北斗（＝台湾彰化）の人はね，（子どもさんが）もう帰化して。千葉県に２人お医者さん，１人は熊本に帰化してるんです。３人お医者さん。相当お金かけたでしょうね。「日本国籍取らしたい」って言ってね，皆帰化してるんです。そういう人たちは，「自分は台湾籍でいいから」って，子どもたちはアメリカの国籍取ったり，日本の国籍取ったりね。「中国籍は絶対い

けない，嫌だ」って。そんなしてましたね。

菅野　中国に対する嫌悪感が強かったと。

宮里　日本に憧れてね。台湾におったくない，中国人は嫌だってことで逃げ出した人が。石垣は沢山いるそうですよ。

　うちの主人の教え子（＝軍隊時代の部下）もね，主人が連れてきて，ここでパインの栽培を指導さしてね。そして，おかげでこのパイン産業が盛んになったんですけどね。これは台湾の人のおかげです。

　この人は，また石垣に帰って，相当広い土地を持ったらしいですよ。本当によく働きよったからね。それでまた台湾から（人を）連れてきてね，使ってましたよ。もう造園業やってたから，後は。

菅野　そうなんですね。

宮里　そしたらね，台湾の人はね，トイレットペーパーいっぱい出してね，使って。（主人は）「もう常識がない！」って怒ってた。（笑い）

　やっぱり中国の領土になったから，皆そうした礼節っていうのはわかんなくなってきてるってね。まだ自分たちの時代は皆もう「日本人に倣え」で行儀よくやってたけどね。中国になった途端に，なんていうかね，唾パッパパッパ吐き捨てるしね，痰を散らかすしね，一時は相当乱れてましたよ。

菅野　パインの指導をしていただいた，その方について教えていただけますでしょうか。

宮里　子育てが忙しくてあまり覚えていないけどね，部下だったんですよ。

　それでね，パイン作ったりしてね。成功してね。農園の経営をしてね。造園業か。造園業やってね。いろんな注文が沢山あったらしいですよ。

菅野　それにしても，宮里ご夫妻は台湾で出会われて，東村のパインも台湾の方が，つつじ園のつつじも台湾から導入されたということで，東村は台湾とのご縁がとても強く，台湾とのつながりで発展したといえるように思えますね。

宮里　あらーそうですねぇ。本当だ。つつじは主人が農林局長をやっていた時に，台湾に農業視察に行ってね，つつじの挿し木について学んできたのよ。それが後になってつつじ園につながった。よく考えたらパインも，つつじも。そうですね。台湾から。不思議とそうなってましたね…。やっぱり不思議とご縁があったんでしょうね。

菅野　それでは時間もだいぶ過ぎましたのでここで聴き取りを終わりにしたいと思います。長い時間にわたって貴重なお話をしていただきありがとうございました。

【本資料は，科学研究費補助金（課題番号：25257009）による成果の一部である】